

笛を持って帰れなかった

松井 匠

「ラリアムよりいいマラリアの薬は」と言いながら足元にリュックを下ろしたスーさんというこの男は、アフリカからここまで来たという。リュックには寝袋まで入っていて、いっぱいになっている。サウスパークと書いた汚い水色のTシャツを大きな体に張り、フィルムケースに入った錠剤を見せてくれたに説明をはじめたのだった。こんなに暑いのに、ぼくはよくこんなところでこんな大きなリュックをおちまける気になるなと思った。「今夜はタージマハールの隣に大きな満月が見える。僕はもうアンコールワットに行くから行けないけど君らは行くといいよ」

ニューデリー駅はどこにでも人が寝転がっている。日陰になったコンクリートの上で、赤ん坊を抱いた女の人の着た赤い生地が冷たく踏まれている。何のゴミだか分からない黒ずんだ布のようなものとスナック菓子のビニールが、どここの壁の端にも落ちていた。駅の構内なのに唐突に体重計があつてその横に座っている子供が、ひと通りあたりを見回したあと地面に両手をつけてじつとうつむくのをすることがあつた。煙草をくわえている旅行者を見つけると、傍に行つてマッチで上手に火をつけるのだ。虫を捕まえたときのよう

空は白熱灯そのものだった。昼間はそれが点いて町を蒸し、夜は消えた。

スーさんは在日の人だろう。日本に住んでいるとは思えない流暢な日本語を話した。真っ黒に日焼けして、軽自動車くらいならひっくり返せそうな機動力のにじみ出た体つきは、このあたりの風景には不似合ひに思えた。眼鏡もずたずたになつて曇っているの。どんな目をしているのかわからない。ふいに目が合ったように思つた途端に、自分が見透かされているような居心地の悪さを覚え、ぼくはこの男に敵意を持った。明日行く予定のアーグラに今日のうちに行くか話し合いがなされた。今日行くと子供のスリと睡眠薬強盗の多いという二等席になるし、まだインドに来て二日目だったので気が引けて、ぼくは反対した。「なんでだ」と岩俣が聞いたので「恐いからだ」とぼくは岩俣の後ろにいるスーさんに向かって言つて、すぐにとんでも情けない気持ちになつた。岩俣はこういうのも何かの縁だから行こうと言ひ、本間も面白そうだと言ひ、熊野はいつものように一人で駅の外を眺めていた。ぼくも横に行つて同じように窓から外を眺めると、リクシャの運転手が木陰で小便をしているのが見えた。話し合いを聞いていたようには見えなかったが「熊野はどうなんだ」聞くと「うん、是非行こう」と言い切つた。熊野が「是非」というのだからぼくも行くしかなかったのだった。

チケットもスーさんが手伝つてとつてくれたので、礼を言つて別れた。ビスケットと水を買ひ込んで鉄の檻のような二等席に乗ると、さっそく隣のインド人が喧嘩をはじめた。人のとつた席に座つてどここうとしない中年男を周りにいるインド人たちが両足を持って

引きずり降ろそうとしている。われわれ四人の横の通路に座り煙草を吸っているインド人も、荷台の上で寝そべっているインド人も笑っている。ぼくは恐ろしくなつて窓の格子から外を眺めた。荒地のところどころに細い木が生えていた。家の跡だらうか、崩れた赤煉瓦の上から裸の少年たちが手を振っていた。気が付くと三人とも居眠りをしていて寂しいので岩俣のひざを押しておどかすと「やめろ」と怒鳴るので、ますます不安になつてまた外を見た。ゴミの山の陰で小さな女の子が二人で小便をしていた。

アーグラは埃が舞っていた。リクシャーが牛をかわしながら排気ガスをたくさん出すので、昼過ぎの光の中で、インド人はどんな黒くなつていった。タージマハールまであと七キロの標識の下を牛が歩いている。猿の引つかかっている街路樹の幹に、白いペンキで線がぬりたくられていて、それはずっと先のほうまで続いていた。リクシャーの運転手にホテルを言くと「あそこは高いよ」と安宿を紹介したが、ぼくはドミトリの部屋の埃でアレルギーが出る嫌だったので、予定通りのホテルタージマハールにいつてもらった。

タージマハールはぼくたちにはぜんぜん高くなかった。クーラーとお湯の出ないシャワーと窓が一つついた部屋で、ぼくはこういうホテルではやけに気持ちが悪く着いた。庭の小さな丘からタージマハールが見える小奇麗な一階建てのホテルだった。

ぼくたちは荷物を置いて町の真ん中になにか食べに出た。いたるところの壁に凡字の落書きがある。たぶん何か商売の広告だと思つた。階段を上がつて二階は金網が四方に張られていて、席から網越しにタージマハールが見えた。タージマハールはいくら眺めても

野区江原町だ」というと「ナカノク」といつて納得して「こいつらは日本人だ！」と宣言してまたチャイをおごつてくれた。アーグラは夕暮れに火照つていた。遠くの音もよく聞こえる夜になると思つた。前にいた男がインドの煙草をくれたのもらつて吸つた。ぼくも東京から吸つていたアイランドを一本差し出した。すると突然顔を背けて困つたように「いらないよ」といつた。ぼくが妙だなと思つて周りを見ると、皆話しをするのもやめて同じようにまじい顔をしているのだった。後ろのほうから物乞いの老人がやってきてその煙草に手を伸ばしたら、隣にいた白いシャツの口ひげの男がその手を払つてしまわせた。ぼくは何か大変なことをやらかしてしまつたようだった。ぼくは煙草をしまつて、その後の談笑にも何食わぬ顔で加わつた。あたりは火照つたままだんだん暗くなつて、前にいる男の顔も分からなくなつてきた。

夜、庭に出たテーブルを囲んでぼくたちはカレーを食べた。懐中電灯が食卓の明かりとしてぶら下がっていて、小さな虫が集まつてその光源に体をぶつけていた。硬い虫も集まつてきてその音はばちんばちんと騒がしくなつた。ぼくは夕方のインド人たちの表情を何度も思い出していた。丘から月と例のタージマハールが見えた。岩俣が「それにしてもスーさんにはお世話になつたよな」とつぶやいたら熊野が「ああ、あの糞野郎か」といつた。

たいして面白くもないのだった。しばらくすると午後の陽のまま霧のような雨が降り、アーグラの町は紫色になつて、すぐに豪雨になり、金網から雨が入つてきて、霧がたちこめ、またすぐに晴れた。タージマハールはそのあいだだけよかつた。ぼくが屋上に出ると、そこは街が一望できた。二建ての赤いレンガの建物がぎゅうぎゅうに集まつていて、壁は崩れているものばかりでみすばらしいシートで屋根を作っている。また急に降り出した雨の中で、下に見える建物の屋上に子供が二人、腕を回してなにかを叫んでいるのが見えた。ホテルの玄関まで戻ると、道を挟んだところのチャイ屋の外にインド人の男たちが集まつて椅子に座つたり寝たりしてくつろいでいる。ひとりの男がぼくたちを叫ぶように呼んだ。

「こつちへおいで。俺たちと話をしよう。お前らはどこから来たんだ？ いいからはやくおいで。ほらその席を空ける。いいからとにかくチャイを飲むんだ。どこでも腰掛けな。おつとその椅子は座つたら五ドルだよ」

木とぼろ布で作つたハンモックや今にも崩れそうな椅子にぼくたちは座り、チャイをご馳走になつた。集まっている中には高校生から小学生くらいの子もいたが、だいたいはいすぐそこころがつているリヤカーや木の束、それにリクシャーを使って働いているインド人だった。後から来た青シャツの男が「お前らは何人だ？ 中国人か？ 韓国人か？」と聞くので「ジャバーニー」といつと「うそつけ、お前らはネパール人だろう。俺はネパール人が大嫌いだ」と騒ぎ出した。周りの男たちがなだめている。「本当に日本人だ」といつと「日本のどこだ」といつ。「東京だ」といつと「東京のどこだ」といつ。「中

土壁がずうつと向こうまで続いている、道路のこちら側にはトンネルのように薄暗くなっている売店がいくつも建ち並び、土埃で汚れた軟らかいベットボトルが店先に積んであつて、その影に無表情のインド人がいる。瓶の炭酸を買つてストローで飲んだが、不味い上に、のどが渴いているわけでもないのどこかに捨てようとしてあたりを見廻すと、熊野が外にいて、壁の方を向いたり、上を向いて空を見て口を開けたりしていた。「あいつはどうかしたのか」とリクシャーの運転手が聞くと本間は「あれが彼のキャラクターなのだ。だから気にしなくていい」といつた。熊野が、熊野の目線の先にある空の、何にそんなに惹かれていのかわからなかつた。

むりやり椅子を並べたので売店の中は身動きの取れず、居心地がよくない。しかし外は外で陽も強く、道路に出ても壁があるだけなので、べたついた瓶を手にもぶら下げたまま運転手の話を聞いた。タージマハールを作つた王の話で、妃のために作つた墓がどうかとか、国の予算を注ぎこみすぎて破産したとか、そんな話をしている。この赤シャツの太った声のいかい男は、あとからガイド料を請求するだろう。われわれは払わないので、それで面倒なことになるだろう。

あたりの建物には何かの広告と思われる文章がヒンドゥー語で書かれている。店の前や建物につけてある看板をよく見ると、時々奇妙な気味の悪い色で書かれているものがある、それはぼくのぶら下げている炭酸の色に似て、本当は誰も引き受けたくない色だ。その色も、錆びた鉄に書かれた文字や、ドアのかわりにぼろ布のか

かった崩れそうな家や、日陰で座り込んでカレーを作っている主婦の集まりや、豚や、ビニールに混じって、あとになっても思い出せるようにあざとく構えたはくは、ろくでもないまいものをつかませて、隠れていくのだ。そうして握ったでっ上げの風景を、自分では見ないようにして、もののしく磨いては、人につきつけることでばくはその場のぎを続けていた。そして、惨めな元であるその色に、それでもばくはまだ誠実でありたいと思っていたのかも知れなかった。

背中が火照ったように熱くなつて、ばくは先に帰ることにした。消化できないものを吐くこともできない気分だ「この先の赤い墓だか城を見に行くのは三人で行ってくれ」と言う岩俣は驚いて「どうしたんだ」と言った。「疲れたからもうホテルで寝たいんだ」と言う岩俣が「おまえは体力ねえな」と言うので目の奥から頭のうしろにかけてしびれたのを感じた。離脱してすぐリクシャーをつかまえ、ホテルに向かう途中の子供の店番する売店でピーリーを買おうとすると、十倍の値段を言ってきた。ばくはそれをその値段で買ってホテルに戻った。カウンターで鍵を受け取り、庭にぬける出口を通って、きれいに芝生のしかれた小さな丘の脇をあるいて、白い壁の建物のドアを開けると、突き当りに部屋があった。大柄なわりに軽い木の扉は、閉めるとばくと乾いた大きな音を白壁に響かせた。ばくは空調のスイッチを入れて、シャワーを浴びた。裸足で歩くとひんやりとして、こすれて熱を帯びた、情けないような、不安なような、頭を垂れた、憂鬱な想念がほろりと欠けて、心が軽くなった。ベッドに寝転がり、メモ帳を開いて、体が冷えきる前に、今

しそうに見えた。

今日は何かの祭日らしくホテルで催し物があり、中庭の丘で足首に鈴をつけて踊るインドの踊りがはじまった。何人かの楽隊が芝生に座り込んで演奏が始まり、チャイが振舞われ、庭に一本だけ立っている外灯の下、女は紅くくすぶった炭のように庭を照らしている。背景の森の暗さで、ひとときわ光を帯びて、金の尾を引いているように滑る女の踊りを見ていたばくは、急に自分の後ろに広がっている暗闇に気付いて、その中の建物や木の枝や人の顔まで感じた。恐ろしくなつてばくは、歯を食いしばって体を死んだようにその場に固めて、じっと目を放さないように踊りを観た。

しばらくそうしているとなんだか自分がいなくなったような気がするのだった。

テンプル・オン・ガンジス

ヨガの呼吸は吐く息のほうを長くする。ばくは出来るだけ長く息を吐き、ゆっくり吸って息を止め、またゆっくりと吐いた。呼吸のこと以外、何も考えられない。そのことがかえってばくを眠りに誘うかもしれない。天井のファンのかたかたいう乾いた音も気にならなくなつてきて、水を飲んだ後、ばくは寝た。

外にはガンジス河が見えた。部屋は屋上なので河の向こうの不浄の地というところまでよく見えるが、向こう岸に家は見つけられず、木が生い繁っている。地面も湿つてぬかるんでいるようで、人

日あったことをまとめて記しておこうと思つたが、それももうなくてもいいとばくは思つた。さつき買ったピーリーを開けて火をつけ仰向けになり、肘を折ってピーリーを上げると、手と煙とがびたりと停まつて、それは理想的な停止だった。ばくはひとつひとつ全部のものを分解し、愛撫して、回収できた。後ろめたさも軽く飛び越えて、なにも起きそうにないこの部屋でばくはやけに楽しかった。こういうときに灰明るく滑りこんで広がっていく諦念を、ばくは心底軽蔑していたにもかかわらず、それはばくを楽しくさせた。水鉄砲の小さな穴のように、部屋の狭さはばくを遠くまで飛ばすのだった。外はインド、と口に出して言ってみようとしてやめたり、奇声をあげてベッドを飛び移ったりしようかと想像したりしては、やっぱりやめたりして、ばくは安堵をよく噛み締めた。やめることの素晴らしさだけがばくを満たすことに、みずみずしさを感じるのだ。この安全はばくと領土を広げてばくを楽にした。

夕方になると、放電して少し温度の下がった繁華街は昼間よりも賑いをみせる。いつどこで聴いても同じインドの歌謡曲が、日焼けした体にこもっている熱のように、朝になるまで耳に残っている。金持ちの家に生まれた青年が町で見かけた女に一目惚れしてそのうち惹かれあうというような話や、踊りの巧い女が金持ちの男を射止めて玉の輿になるという話の安っぽさを笑えば、この国の町を知つたような気になつて道の真ん中を悠々と歩けるかもしれないとばくは思つたが、実際に暗くなつていく繁華街を歩いていると誰も彼もがこつちを見ているような気がしてばくは俯いてしまったし、店先でたむろしてチャイを飲んでいる人たちは、表情は硬くても実に楽

が住んで居るようには見えない。こちら側はどこを見ても人間がひしめいているというのに、向こうに誰も居ないというのは妙な気がするのだった。ばくはこのテラスで毎日ラッシーを飲んでガンジス河を眺めた。真夜中になると遠く町の中心の方から音楽や人の声が、虫の声に混じつてかすかにここまで空気を震わせて、このあたりに住む人々のざわめきが、浮いてくるようになる。すぐ下に見える外灯の下では子供が走り回っている。ここから観ていると、人の往来は昼間と変わらない。一瞬ぱつと頭上が明るくなり、大陸の上空で寝そべった、毛の荒れた、汚れた巨大な黒い馬の腹のような雲の、ところどころからほつれた糸のように稲妻が渡るのが見える。時折、下に向かって垂れていく雷をなぞるように、向こう岸に目を落としていると、暗黒の河岸にいくつか、線香のように赤い焚き火がちろちろと燃えているのを見つけ、ばくはそれをいつまでも眺めていた。ばくが見ているのではなくて、風景のほうがかくを延々と通り抜けていったが、それはひやかしたかった。

テラスにいと、本間が帰ってきた。すぐそのガートで子供と仲良くなつたという話を聞いて、自分も出歩きたくなつたばくは、本間をさそつてみようと思つた。「人が焼けるのを見に行こう」町の中心部のガートに火葬場があるのだった。「おれの喘息はよくならないみたいだから、無視して行こうと思うんだ、連れて行ってくれよ。たのむよ」じゃ是非行こう、と本間は言つてすぐに出発した。カメラと貴重品だけもつて、外に出てリクシャーを捉まえた。道がからからに乾いて黄色くなっている。窓も扉もないリクシャーに乗ると、自分は目の前の風景と関係していた。風景は絶倫だった。ホ

テルの部屋にいるのは好きだったが、二日も部屋で息を吸ってまた吐くことだけ集中させられているとすべてが馬鹿馬鹿しくなってきた、後ろめたいのだった。店の立ち並ぶ広い通りでリクシャーを降り、狭い路地に入っていくと表情のない子供がついてきて、「どこに行くんだ」というので「マニカルニカー・ガートだ。ガイドは要らないよ」と言ったら「ついて来い」と狭い路地をさらに狭くしたところをどんどん進んで行く木材置き場がそばえたついで、そこをくぐるとガートが開けた。足元に黒い小さなヤギが二頭、首を垂れて、お互いの角を絡ませて、ぶつけ合って鳴いている。沐浴場であるガートは、階段状に河の中まで入れるようになっていた。下から水浴びを終えた、首をつながれた水牛の群れとその牛追いたちが、信号待ちの渋滞が動き出したように上がってきて、あたりは水牛の背や尻尾のぬらぬらとした熱気がひろがった。無数の低い鳴き声と、でかい体なのに十分な速さで階段を上がっていく硬い足音が、腹から水の滴る音と一緒に、ぼくは水蒸気の中にいるような気持ちでそこに立っていた。中腹の踊り場で小さな牛と牛追いの子が、歪な円を描くように、階段を上ったり下ったりして、走り回っている。喘息のか細い呼吸のせいか、その風景は確かにまどろんで見えたし、さっきから本間もぼくも一言も話していなかった。ガートの一番下の河に臨むところまで下りて、浮かんでいるボートの鼻先に、火葬場があった。柵で仕切られたその奥で火が二つ焚かれていたのだった。柵のむこうには数人の男女と、死体を焼く男と、その灰を掃いて船に落とす男がいる。ぼくはここでこの光景を観て、劇的な死生観がぼくを貫通し、圧倒して、感覚ごと転倒させて、受

途中で降りたぼくたちはそこからホテルまで、街に射す光から早足で逃げまわった。誤って入り込んでしまった脇道には遠目に家があつて、ハンモックに揺られて中年のインド人が寝ているようだった。そのむこうには海が広がっていた。足元をみると、掌よりも小さな濡れた黒い子犬が、草の中でぺちぺちと横たわって、懸命に肺を膨らませている。それは息絶えようとしていた。焦げて焼き鳥のように油を滴らせる前の、あのインド人のように。

Y M C A

1

夜中のガヤ駅は昼間よりもずっと人が多い。

煙草屋の露店で座り込んで葉を巻いている老人に、ピーリーをくれと言ったが何も返事をしない。ラジオからインドの歌謡曲が延々と流れて、駅の周りは水没したように鬱蒼とした暗さとざわめきがあつた。家族連れが多く、すつ裸の赤ん坊がきれいな布の上のところがついていて、無表情な母親はその横であたりを見回してからまたじつとした。父親は髭を触ったりしながら電車を待っていた。下で物を拾っている子供がいたかと思うと、暗い中で線路を修理している駅員のような二人組の男や、抱えた子供に上から小便をさせる母親もいて、ひっそりとした暗い夜のプラットホームの上は絶えず人影がうごめいていた。それはなにやら内緒話をしているようでもあつたし、どこでも体ひとつで生活しているインド人同士の、寝場

胎させてくれることを、どこかで期待していたが、なんのことはない、死んだ人が燃やされているのだった。ただ、きれいな生地に包まれた死体の足が、炎の中で少しづつ少しづつ焦げて光り始めて、その踵から一滴ずつ脂が落ちて、前に燃えた人間の灰に落ちる音がしたので聞こえた。ぼくは何時間もそこに立って、自分の体にその音と黒い踵だけが蓄積していつて、層を成していくのを、ゆっくりと感覚していた。喘息が、その微かな層の堆積のもつ速度の穏やかさと一致して、治癒していく。泣いている女が、声を詰まらせているのが煙の向こうに見える。色鮮やかな生地はなかなか燃えていかず、屈強な上裸の男が、煙の中で延々と灰をボートに落としている。脂ぎって黄ばんだ、心地よい時間だ。水牛の残っていた湿気と目の前の焚き火に当てられて、ぼくは自分の骨が温いを感じた。ぼくたちをずっと待っていたあの子供は、案の定ガイド料を請求してきた。ぼくは四百ルピーと言いつつも後ろをついてくる小学校高学年くらいの子供の、憎悪と、居直りと、面倒くささの入り混じった表情を見て、率直にうんざりした。そのうち、警察と名乗る高校生くらいの男が二人加わってついてきて、大きな声で嘲笑しながら、ぼくたちの背中に罵詈雑言を浴びせてくるようになって、ぼくはいよいよ、少し戸惑いの残っていた怒りが、真つ黒なインク染みのように背中からその領土を広げていくのを感じた。それを察してか、自身も疲れきったのか、本間が百ルピー札一枚握らせた。ぼくたちはそれでもまだ追ってくる三人から逃げるようにして大通りに出て、サイクルリクシャーの老人を捉まえた。老人は鹿のようにしなやかな足でぎこぎこ道道を裂いて進んでいった。

所の取り合いが聞こえてくるようでもあつた。遠くのほうで水がこぼれる音が時間をおいてくりかえし、いつまでも聞こえた。誰か背の低い人が、かがみこんで手を洗っているのだろうと思った。手を着くとぼくの手はとても汚れる。駅にあるあらゆる物が汚いので、みんなよく手を洗うのだろう。どこにいてもインド人は手を洗っている。長い筒の中を幽霊が通ったような音が、プラットホームの端のほうから聞こえてきたのでそっちに行ってみると、そこで途切れている屋根の一番端に、鼻がとまっていた。寝ている家族の脇でひとり起きて座っている父親の真上に、その眼の完全な円が二つ、小さく光っていた。すさまじい星空だった。列車は何時間も遅れることがあるので、時刻表は大体しかあてにならない。ぼくたちは来る列車来る列車、その胴体に白く書かれた数字やアルファベットをよく見ていなくてはならなかった。月明かりに照らされて、ごと、ごと、と静かに行くのもあれば、悲鳴をあげて停まるのもあって、その度に岩俣は右往左往して駅員に「この列車で合っているのか」と尋ねてまわった。駅員はことのほか正確に情報を与えてくれたので、ぼくたちは目当ての寝台車に乗ることが出来た。寝台車の中は空調が効きすぎていて寒かったが、嬉しいことに無愛想な鉄道員が、エアインディアの機内食とほぼ同じ食事を持ってきた。それをあつという間に平らげて、ぼくは毛布を一枚よけいにもらって、二段ベッドの上で寝た。

岩俣に起こされたら、カルカッタに着いていた。硬いベッドと寒さのせいで体中が痛かったが、カルカッタは喧騒の都会と聞いていたので、ぼくは少し期待して駅に降りたのだった。都会という言

葉は、なにやら形の定まらないやさしい場所のようにぼくは解釈していた。都会にいれば、自分の持ってきた呪いはいつでも都会と半分ずつに出来て、ぼくは窒息せずにすむのだ。それが何の解決にもなっていないことと自分が都会をつくっているんだとぼくは思っている、たいそう居心地のいい場所として、ぼくの生息範囲の中心は都会の真ん中でなくて、淵のほうなのかもしれないと、勝手に思い込んでいた。だから何かしら新品の器械のように、わくわくさせてくれることが起きるのではないかと、密かに少しだけ胸を躍らせていたのだった。

駅の外は黄色いタクシードが敷き詰められ、そのエンジンの熱であたりは灼熱だった。人間の臭いと油と排ガスで蒸されたターミナルはいかにも都会のものだ。ぼくたちは冷房の効いたタクシードに乗り込み、ドアを開けた。油膜が張ったような体が冷えていつて気持ちよかった。舗装された道をタクシードは、高速道路だろうか、高架下に沿って走り出し、一斉に曲がっていった。水パイプを持った老人が信号待ちの車の窓を叩いて回っている。ゆっくり車の間を歩いている白い袈裟を着た老人は、外にいるのだ。窓から老人を眺めていても、老人と目が合うことはない。隣の黒い高級車から顔を出した女が、道路に茶色い唾を吐いた。その上では、高架の柱の大規模な補強工事を行っている。ぼくはぼんやりと、それでいて新鮮な心持ちで窓の外を眺めた。先の尖ったおおきな船のようなカルカッタだ。メイנסトリートには大きな看板をかぶった高いビルが並んでいて、不自然に整った公園もある。アーケードの露店で時計を売っている男のわきの、広い暗がりの階段がY M C Aホテルだった。

埃臭くじめじめした暗いロビーのカウンターに、油で硬い髪を分けて、二人、揃いのシャツのインド人がいた。「お前は仏教徒か?」「ぼくの首の数珠と、パスポートの写真の坊主頭がそう思わせたのかもしれないかった。」「ここは飲酒を禁じる宗教の多い国だから、部屋で酒を飲んだりするなよ。まあおれたちは今から飲みに行くところだけだな」といった男の他愛のない冗談も、ぼくには気が利いているように聞こえる。

ぼくたちは町へ出て、教会の十字架の見える大通りのY字路を集合場所に決めて分かれ、ぼくは本間と両替屋に向かった。野球の球くらいの、青林檎のような色をした硬い果実に塩のようなものをふって売っている露店が、信号のあるところには必ずあって、器用にへたを取ったその実を、立ち止まった人たちに何も言わずに渡しては、渡されたほうもそれをかじりながら小銭を渡していた。それを食べてのどを潤しているのだ。その実よりももう少し小さな、きれいな緑色をした柑橘類の果実をグラスに絞って、それに砂糖をおち込んだ飲み物をぼくらは5ルピーで買って飲んだ。青臭い苦味が舌に広がっていくのと同じように、空にはちようど雲がかかっていた。

3、4階建てのビルが並んでいるこの通りのどこかに両替所があるはずだったが、どれもこれも魔ビルのようで不気味だった。そのなかでも一番暗くて人気がない、半分格子の閉じたビルの五階に両替屋はあった。ビルの内装は、金の枠で囲われた各階の案内板や埃まみれの階段の手すりがいギリス調で、電気がついていないせいで、かび臭さが際立った。ぼくと本間はその階段を五階まで昇り、

暗い廊下の途中に日本のオフィスの給湯室くらいの部屋から光が漏れているのを見つけた。部屋のなかには椅子が四つ並んでいて、対面するカウンターの透明なプラスチックの板に小さな穴があけられている例の仕切りがあり、ここで両替をするようだった。車の音もここでは聞こえず、コンクリートの壁のひやりとした静けさにはぼくのサンダル音が申し分なさそうに響いていた。ぼくは一気にふところ冷えていくような心細さを感じ、おかしいと思ったが急いでいる男がいるのでぼくが壁に沿って並んだ椅子に座ると、ぼくらの後ろで順番を待っているように立っていた男が「飲み物はいらないか?」と言ってきた。「いらない」というと入り口のほうに立っている若い、まだ学生のような二人の青年とおそらくベンガル語でなにやら話をしだして、横目でこちらの様子をうかがっている。椅子は黒くて薄い革のものが二つと、もう二つは錆びたパイプ椅子で、立ち上がるとすれ違うのもままならない細くて狭いこの部屋の、隅々の温度まで感じとるようにしてぼくは待っていた。するといつのまにか部屋が結露しはじめていた。すぐにこの部屋はまづいとぼくは気がついたが、知らないふりをしてやり過ぎすほかに方法も思いつかなかったのだ、ぼくは即座にそれを選んで身を硬くした。預けてあるはずのもう半分が、この部屋に入ってきていた。釈明できない田舎が滴り落ちてきた。頭から指先までが徹底的に呪われているような気にさせられるあの田舎だった。これに捕まったら、ぼくはずたずたにされて、あつという間に淘汰されてしまうに違いない。ひよっとしてぼくはこのまま都会に裏切られてしまうかもしれない。

と思った。しかしぼくが裏切られたことを言いたくしなれば大丈夫だ。確信してしまうことが今最もしてはいけないことだった。隣にいる本間も少しそわそわしているように見えた。口をついて出る言葉がなにも見つからないので、ぼくはじつと黙って待っていた。カウンターから紙が渡され、両替する金額を書いて小切手にサインし、札束を受け取ってぼくは足早にその部屋から出た。うしろで男が何かを言っているようだったが、階段を駆け下りて外に出た。外は雨が降っていたが明るくて涼しかった。屋根のある露店の白いシートが歩道に並んでいる。まわりついた陰気が散っていた。ぼくはできるだけ素早く身軽に人をかわしながら、助かったと思った。Y字路に行くところ岩俣が露店の屋根の下で、陽気な初老の本売りにチャイをご馳走になっていた。ぼくも岩俣にあやかっけてチャイを飲んだ。本売りはぼくらの肩に手をまわし踊り始めた。素焼きの器を落として、踏みつけた。破片はこなごなに見えなくなり、雨ですぐに地面になってぼくを安心させた。

「あいつ、川沿いに橋の向こうまで行ってくると言っていたけど、あつちはスラムだよ。本間はさつき行ってきたんだろう?」「おれは橋の上までだよ。そこで写真を撮ろうとしたら警察にフィルムを没収されそうになった」

キャップをかぶった白人の女が肩や背中を日焼け止めで真っ白

にして、ぼくたちの斜め前の席で食事をとっていた。その左の席、本間の肩越しに見える席には肥り過ぎて机が窮屈になっている白人の老夫婦がいた。公園のランニングを終えて涼しい喫茶店に寄ったという感じで、どっかり座っている。よくその身体を引っ張ってカルカッタまで観光に来たものだとぼくは感心し、半ば呆れた。そのあいだを面倒くさそうに仕事するインド人のウェイターがうろうろしているのだった。いろいろな国の言葉が店を賑わせていた。油汗と一緒に、胃の真裏あたりに嫌な気分が滲んできていてそのせいで店内の外国語はやかましくぼくを陰湿に攻撃しているように思えた。「熊野は大丈夫かな」「まだ三時だから、心配することはないだろうよ」と自分で言いながらも、ここ数日度々襲われる虚無感がぼくの陰気な想像力を後押しして、実際のところは不安なのだった。

熊野がどの程度英語を話せるのかも、ホテルまで戻って来られるくらいの土地勘があるのかどうかもわからなかった。ぼくは、悪いイメージしか浮かばなかった。ぼくは席に座ったままそれ以上にも考えられなくなっていた。二十日間の旅路はある程度ぼくを周りの風景に慣れさせてしまっていた。はるばるカルカッタまで来て日本にいたときと同じような虚脱状態に自分があることが、ぼくを心底情けない気持ちにさせていたのだった。「居心地の悪いカフェだね、どうも」本間の言う通りだと思ったが、まだぼくのラッシーが来ていなかったのウェイターを呼んで催促すると、ウェイターは無表情のまますぐに持ってきたのでぼくは目立たないように一気に入れを飲み干すと会計をして、はじめからいなかったかのようにさっと店の外に出た。

熊野に関してはぼくと本間に全権を委ねていた。岩俣が日本にいる片思いの女の子に、路地の売店で買ってきた絵葉書に文を添えて送るというので出来上がったその文面を見せてもらった。その文体は彼が読んだばかりの『ライ麦畑でつかまえて』そのものだったのだからぼくと本間は笑った。

いままで泊まってきたホテルの中でも広く、天井も高いこの部屋は話をする声が天井に吸い込まれていき、話の内容よりも、自分の発した普段よりも僅かに大きな声が部屋を隅まで満たすように、そしてそれがわからないようにさりげなく努めながら、ぼくたちは談笑した。

「エロ本を買おう」と半ばやけになってぼくは言った。なにか思いついたらすぐに跳ねるようにして行動に移れるよう、前のめりになつてベッドに座っていた本間が、まだ暗くなる前に部屋に戻ってきてしまった好奇心と体力とを持て余していることはすぐにわかった。一瞬なにかを思い巡らせているような表情をみせながらも、きつかけを待っていたように本間は立ち上がり、嬉々とした動きをぼくたちに演じてみせてから、すばやく部屋を出た。

手元にあった買ったばかりの笛をくわえてみると、息を吹き込む穴のところに薄い木板が張り付いていて吹くとそれが震え、ペーという音がした。指で押さえる穴が五つ開いていたが、穴を押さえないで吹いても、押さえて吹いても全く同じ音がした。全部の穴をしつかり押さえて慎重に吹くと少し低い音になったような気もしたが、何度やっても擦れて調律の合わない弱弱しい音しか出なかった。ぼくはこんな長細いものを買ってしまったことを後悔した。荷物の

店は小さな交差点にあり、出てすぐの道端には黒衣をまとった女たちが集まって座り込み、ナンを作ろうとしているのか、粉を練ったり、火をおこしたりしている。近所の主婦たちが自分の家の調理器具を持ち寄って、井戸端会議をしながら夕飯を作っているのだろうかと思像しながら見ていたが、誰も口を開かずにもくもくと仕事のように作業していた。道を渡ってぼくらが店で水と紙を買おうとしていると、先ほどの集まりの中にはいなかった赤ん坊を抱いた母親がぼくの肩をたたき店の棚の上の方を指差して、懇願の表情で手を合わせた。それを見てとった店の男は間髪入れずに「この母子にミルクと紙を買ってやれ」と言って背を向け棚に手を伸ばし粉ミルクと紙を出したのだった。ぼくは一瞬にして額から背中までこの男への嫌悪感でいっぱいになったが、本間が迷わず母子にそれらを買ひ与え、母親はまた手を合わせて道の向こうに消えた。

四時に一度集まるということにしてあったのでホテルに向かつて歩き出すと笛売りの老人が粗末な笛を売ってきたので、気晴らしにそれも買ってぼくらは部屋に戻った。ホテルの部屋には前日ドミトリの部屋に泊まりに行った岩俣が帰ってきていた。ベッドに座って何か小物やパスポートを広げながら「おう」と挨拶をした岩俣の顔は、旅の初日より少し奔放でタフな印象を放つようになっていて、その全く衰えを見せない体力と精神力にぼくは少なからず驚き、羨ましくも思った。「熊野はどこに行つたんだ？」と岩俣はぼくに聞いた。「大きな橋があるだろ。あの橋を渡つた向こうのほうに行つたよ」ふうんと岩俣は言つてドミトリのホテルで泊まった昨夜の話をした。岩俣はこの旅で始めて熊野と知りあつていたので、

詰まったリュックには入らないのでこれからずっと手で持ち歩かなくてはならないと思うと、この笛は東京まで辿り着かないと漠然とした気持ちで笛を眺めた。

もうすぐ夜になる。もしも熊野がスラムに行つたのだとしたら、夜のスラムで日本人の学生が無事に済むはずがないのは明らかだった。時刻は午後七時に近づいていたのを、岩俣が自分の腕時計をみて気付いた。「さすがに心配になってきたな。もしも今日帰つて来ないってことがあったら、おれたちはどうするかってことを相談しておいてもいいんじゃないかな」という岩俣の提案で、とにかく対策だけはここで決めておくことにしてぼくらは考え始めたが、捜しに行こうにもどこをどう捜せばいいのかわからない。大袈裟なことだが仕方がないので、八時になって完全に日が落ちてしまつたら日本領事館に電話をして相談することにした。

そうこういつているうちに思つたより時間をかけて帰ってきた本間が持ってきた二冊の雑誌は、雑誌というよりは紙の束で、欧米の週刊誌から水着写真やハリウッド女優の露出度の高いドレス姿の写真などを破つたもの集めてとめてあるだけのものだった。勢いで言つたにしろ現代インドの性文化に期待していたぼくらには退屈な代物だったが、何枚かの写真はぼくの興味を満足させるものだった。それは肖像画にみられる上半身を撮った構図で、青一色に塗られた壁の前で中肉中背の二十代後半のインド人女性が、紫の生地のお腹から大きな胸を出し、口を真一文字に結んでこちらを凝視している写真で、昔の映画のようにほんの少しぼやけていた。その女はただひたすら「写っているだけ」なので、ちょうどそれは夢の中で見る映

像のように距離を感じさせない不気味な傲慢さがあり、やけに体の大きな女のように見えた。

八時が来てしまったのでぼくたちはロビーに行き、岩俣がカウンターに二人組みに事情を説明し始めた。ロビーも天井が高く、暗いが内装も凝った造りの三階建てのホテルなのにこの二人とコック以外の人間をホテル内で見ないことが、よりこの建物全体に不吉な印象を受けさせられる要因になっていた。岩俣はカウンターの電話から領事館の日本語を話せる人につないでもらおうと、事の顛末を話していた。熊野は河のほうに行つたと思うと言う岩俣に、椅子に座っている男は「なるほど。で、そいつは泳げるのか？」などと言ったがぼくたちの神妙な顔つきをみて気を取り直し、受話器をとった。ぼくはただ何もせずに、事が進んでいくのを突っ立つたまままみっていた。

緩やかに腕を組み、体を支えるように抱いて何にも臆していないふりをして立つぼくの体はまだずいぶんきれいなままだ。骨も爪も手も、二十年も使ってきたとは思えないほどに何の傷痕も残っていない。ぼくの体の内臓だけが衰弱して干乾び、ぼくはそのきれいな体で空っぽになった。ぼく自身の胴体を支えているのだ。臓器の重みは、気がついたときにはもうありとあらゆるものに配つてしまつていた。それと交換に腕の骨がむずがゆいような焦燥を、ぼくは自分で裏切り続けることになるだろう。けれどそれはやはり嘘なのだった。現に今抱えている熊野に対しての憤りは、ぼくを激怒させるだけの火力を持っているように思えたし、ぼくはそれに期待していた。先送りにするというよりは大事なものを後に残しておくように、

出国手続きをするためのカウンターにも人気がなく、電気も半分しかついていなかった。二つだけ開かれているカウンターがあつて、そこに行くともものすごく不機嫌な顔をした男が中に座っていた。何事か話しかけてきたが、ぼくが適当に相槌をうつと、かちゃんと判子を押しつつのうなずき方だった。どうもという意味でナマステと言つてぼくは出国した。天井が低くなりガラス張りで見えるようになったところを進んでいくと、仮眠ができるように暗くなつた一角に、眠るための大きなリクライニングシートが並んでいた。同じ日本人旅行者がそこで騒いでいた。スケボーでもするような格好をしてキャップをかぶつた連中が、顔の腫れたような女と、その連れの色白の女を口説いていたのだ。連中とぼくはなんの関係もない。それなのにぼくは無性に腹が立ち、どうしようもなく湧いてくる怒りに体を震わせて、シートに身をうずめた。なぜこんなに自分が怒っているのかわからなかったが、怒るのをやめる理由もなかった。怒りはいつまでも鎮まらなかった。ぼくはそのままの姿勢で搭乗口が開くのを待った。

となりで同じように皆も座っていた。皆にか神妙な面持ちになるのを避けるようにして、ぼつりぼつりと他愛のないことを話していた。そんななか岩俣が買ってきた英字の週刊誌は、日本の首相が神社を参拝している写真と、韓国の学生がその抗議に指の先を切り落としたという記事が表紙だった。恭しく境内を歩いているその姿は、ムンバイ空港の椅子に座つてその記事を読んでいるぼくにとつて愚かだった。けれどもそれは自分の国で起きている出来事なの

まだうまくその憤りを欺いて会話を遊び「さっきの本はどこかの露店で買ったの？ずいぶん遠くの方まで行ったのか？」と本間に話しかけると、本当はさっき売店で会った母子を捜しに行つていたのでと本間は言つた。自分があの母親の抱いている赤ん坊だったかもしれないと呟くように言う本間の顔を驚いて見ていると、その後から熊野が階段を上がつてきた。

「おい、お前どこに行つてたんだ？なんで四時に帰つてこないんだ？」単刀直入のぼくの問いに熊野は「川沿いを歩いてたんだ。一度四時にホテルの前まで帰つてきたんだけど、ここで戻つたらおれはだめだと思つたんだ」と言つた。ぼくは怒れなくなつて、それ以上何も言及できなかった。そしてそれはこの上なく公平なことのように思えた。

成田

いつも買つていた「501」という銘柄のビリーを、五十袋土産にした。「501」と書いたラベルは、円錐の先端を切り落とした形の袋の底に貼られていて、そのビリーを巻いている工場長の丸顔が写真になつて写つていた。砕いた葉を同じ葉で巻いただけの簡単な煙草なので、短くなつてもまたそれを砕いて吸えると思ひ、ぼくはあさましく吸殻を集めていた。五十袋の新品とは別に、リュックのポケットは吸殻でいっぱいになつていて、東京に帰つたら、この吸殻をパイプにつめて吸おうと思つていた。

に、ぼくには外国のことのように思えた。これから向かう国が、自分の生まれ育つたところで、そこに家族も友人もいるということが、不思議でならなかった。ぼくは自分の身に違和感が息づいていると思つた。デリーの空港から出たときに生まれたそれは、雪で作る玉のように少しづつ大きくなつては踏み固められ、また大きくなつては踏み固められて、しらすしらすのうちに、はじめからあつた臓器のようになつては困るほどしつかり形をもつて、ぼくにその水草のようにか細い根をおろそうとしていた。そしてそれは溶けていつてなくなつてしまふものだと感じた。東京はどこを歩いていても、どの建物に入つてもどの部屋で寝ても、この違和感を溶かしていくことを、ぼくはよくわかつていた。だからこそ東京はやさしかった。植物のように穏やかに、動物のように奔放にもなれないぼくは東京に抱え込んでしまった。ぼくに息づき始めた違和感が、ドライアイスのように跡形もなくなつたら、ぼくは東京のやさしさの底でだらしない寝そべつて、赤ん坊のように寝よう。

ぼくたちはこれから、日本人でいっぱい飛行機に乗って成田に着くだろう。成田空港の床はカーペットになつていて、ぼくは「この床なら簡単に眠れるな」と岩俣に言う。それからぼくは家に電話をし、たぶん祖母が出るだろうから、元気に帰ってきたことを伝えて電車に乗るのだ。電車の中は冷房が効いてとても冷えるので、ぼくは旅の疲れで熱が出るかもしれない。日暮里で電車を乗り換える頃にはふるえていて、皆少し心配してくれるだろう。朝の通勤が終わつたあとの気の抜けたホームで自動販売機のジュースを買つて

なことが起こるのをじつと待つため。

山手線に乗り、熊野と本間と岩俣は池袋で、ぼくは目白でそっけなく別れるだろう。向かえに来てくれた母の車の中で、看板の日本語表記をとりとめもなく読んでみると、道路も看板も、ぼくをひやかすように貫いていくのでなくて、おもったとおりぼくは放っておかれる。家に着くと弟達や妹に騒がしく迎えられ、風邪薬を飲んでから奥の部屋の布団ではくは眠るのだ。起きると外は大雨になっていて、雨の匂いがインドのときと違うので、柱も障子も畳も見たことのないもののように感じる。天井が黒く湿って、冷気を放っている。枕元に弟が買っておいてくれた週刊誌が置いてあって、それをめくってもう一度眠る。夕飯に日本の料理を食べてぼくは、本当においしいと言う。「インドの食べ物はおいしかったの？」と弟が聞いてくるのでぼくは「ずっとカレーだったけどすごくおいしかったよ」と言うだろう。柱にぼくがヴァナラシから出した手紙が張ってあるのを見て、本当に帰って来たのだと実感するのだ。食べ終わったぼくは雨の中、傘を差して散歩に出る。家の前の公園を過ぎて、昔小川だったという細い小道に入る。傘に落ちる雨の音を聞きながら歩きつづけ、ぼくはその音を選ぼうとしているのだと感じる。あたりの水たまりが、頬を寄せ合うようにしてくつきあって、ぼくのサングラに着いた土や埃を洗い落としていく。車が通りすぎる音も、クラクションの音も、雨の音も、とても近くの音なのだ。それは選び分けることも退けることもできないもののように思える。

家の前の公園に入ると雨は霧になつて、土は濡れて膨らんでいる。一つの水たまりに浮いている公園の、斜めに染みていく霧の中で、ぼくはベンチの背もたれに腰掛ける。そこで、とてもささやか